

【論文】

## カップル空間の共同性

—日本の社交ダンス界における身体接触と競技化—

井上 淳生

### 1. はじめに

#### 1-1. 問題の所在

本稿の目的は、日本の社交ダンス界に見られる一对の男女（カップル）の相互関係のあり方を事例に、人工的に創出された空間に参集する人々が、空間内に設定された「異性との身体接触」という非日常的な与件にいかに対応しているのかを考察することである。

一般的に、集団を語る上での男女の「組」は、「ペア」という用語で表現されることが多い。しかし、本稿で取りあげる事例では、「ペア」という用語が持つような生物学的な雌雄の関係（生殖行為を含む）の要素が薄いという点や、「カップル」という用語が現場で実際に広く使われている点を考慮し、また、この語を使用することで事例の特質がより正確に浮かび上がるという期待を込めて「カップル」を採用した。本稿における「カップル空間」とは、「カップル」という男女の関係の「形式」に沿うことが要求されるような空間のことを指している。「カップル」という単位に見られる相互関係に注目することで、今後、ある空間に生まれる共同性の分析につながるものと考えられる。

人類学ではこれまで、人々が集まる様々な形態の集団が考察の対象とされてきた。そこでは主に「民族」のカテゴリーにおいて語られる「生活の必要」によって結ばれた集団（e.g. 松田 2004）や、政治的、経済的、身体的な様々な「問題」を共通項に、切迫した生存意識によってつながった「社会的マイノリティ」の集団（e.g. 田辺 2008）が主な対象に選ばれてきた。それに対し、本稿で注目する社交ダンス界は、「非日常」を基調としつつ、「カップル」という「形式」に沿うことが要求され、その「形式」に依拠することを受け入れた人々によって形成された集団である。「非日常」を基調とした集団であるという点、および「カップル」という男女の関係の形態が共通項となる集団であるという点で、これまでの人類学的な集団に対する考察に新たな可能性を拓くものと考えられる。

「社交ダンス」は、これまでその非日常性が強調されることが多く、それ以前の日常的な背景と分断された特異な空間であるというとらえられ方が主流であった。しかし、本稿では日常と非日常との連続性という視角から「社交ダンス」という対象をとらえ直したい。

#### 1-2. 調査の概要・本稿の構成

本稿は、2006年11月から2010年2月までの期間および、2010年4月から現在まで、筆者自身が「教師／ダンサー」として現場に参与しつつ継続的に行っている<sup>1</sup>、日本の社交ダンス界における現地調査に基づいている。特に北海道の札幌市、小樽市を中心とした5か所の社交ダンス教室、2か所のダンスホールにおける観察およびそこに参集する計32人の「教師／ダンサー」「生徒／お客」<sup>2</sup>を対象に行った調査のうち、「生徒と教師」「生徒と生徒」「教師と教師」という3類型のカップル（男女の組）に対する調査を本稿の記述の資料とする。

日本の社交ダンス業界における北海道、特に札幌、小樽、函館という土地は、関東、関西と並んで社交ダンスの歴史的展開に大きな役割を果たした地域である。

本稿では次のような構成をとる。まず第2節では、近年の人類学における共同性の議論を整理し、「無縁の共同体」という枠組みと社交ダンスという事例の関係について検討する。次に第3節では「社交ダンス界」という空間の日本における来歴および現状を概観し、「異性との身体接触」という要素が日本の文脈において、いかなるものとして扱われてきたのかを検討する。第4節では、そこにおいて見られる「異性との身体接触」の意味付けを「生徒と教師」「生徒と生徒」「教師と教師」という3類型のカップルを事例に考察する。最後に「カップル空間」という枠組みの位置付けについて検討し、特定の「形式」が支配する空間における対人関係を考察していくための今後の展望について指摘する。

## 2. 人類学における共同性研究

### 2-1. 「無縁の共同体」と社交ダンス

近年の人類学における共同性の研究の背景には、「個人が因習に縛りつけられている閉鎖的で均質な共同体」（小田 2004: 236）と、あらゆる社会関係から断絶された独立自存する自由で孤独な個人の集合という、人々の集まりを説明する上でこれまで参照されてきた二項対立的な構図への批判がある。換言すると、寄り集まった人々の醸し出す共同性は、共同体の行使する規範を人々が受動的に共有することによって生み出されるものでもなければ、集団内外の「しがらみ」から完全に自由な個人によって「創発的に」生み出されるものでもないという認識が、人類学的な共同性の議論の主流になりつつある（cf. 松田 2004、2009、小田 2004、田辺 2008）。

本節では、以上の議論を踏まえ、特に後者の立場に位置付けられる土屋恵一郎の「無縁の共同体」に注目し、「無縁の共同体」という枠組みと社交ダンスという事例との関係を検討する。土屋の言う「無縁」とは、ある空間に参集する人々が、各々に備わった社会的地位などの属性を伏せた（隠した）状態のことを指す。そして、土屋は「無縁化」された人々が集まることによって生まれる共同性のことを「無縁の共同性」<sup>3</sup>と概念化し、その具体例として、連歌、華道、謡曲、社交ダンスを挙げている（土屋 2003: 23）。同様の議論を展開する松岡心平は、中世日本の連歌を事例に、その連歌の場を「無縁平等の共同性の支配する」場と規定しつつ、「いったんそこに入れば社会的関係をわすれて一味同心できる共同世界」と表現している（松岡 1993: 70）。

近年の人類学的な共同性の議論に照らせば、このような「無縁の共同体」の議論に対しては次のような批判が可能となる。それは、無縁化（デラシネ化）した個人を想定するという脱中心的な思考では、その空間に参集する成員の差異を強調することはできても、お互いを「つなぐ」様相を説明することができないというものである<sup>4</sup>。

確かに、各々に備わった属性（富や地位などの社会的名声）といった「生活的背景」から完全に分断された者同士が寄り集まった時に、その集団が「孤独な群衆」（小田 2004: 237）となることなく、お互いを「つなぐ」何らかのつながりをいかにして生み出しているのかを観察することについては困難が伴うように思われる。また、そもそも「民族」を単位とした共同性の立ち上がり方に主に焦点を当ててきたこれまでの人類学にとっては、松田素二の言うように「生活的背景」と切り離された共同性は想定しえないものである（松田 2004: 264）。

しかし、ジャン＝リュック・ナンシーの〈分割＝共有〉モデルを引いて大杉高司が指摘したように、「〈断片〉が〈断片〉であり、〈分割〉が〈分割〉だからこそ〈共同性〉が成立してしまう」（大杉 2001: 290、傍点は引用者による）ことも起こり得る<sup>5</sup>。つまり、互いの「生活

的背景」から完全に分断されているがゆえに、集団は「孤独な群衆」に転化するのではなく、逆に新たな次元での「関係づけ」による共同性が生み出される、ということも可能になるということである。

「無縁の共同性」は、各個人が各々に備わる「生活的背景」（例えば、富や社会的地位、学識、名声、能力、功績などの属性）から離れ、その空間に設置された「形式」に沿ったふるまいをすることにより醸成される関係性のことである。このような「＜分割＞ゆえに立ち上がる共同性」という観点からすると、本稿で取りあげる「社交ダンス界」は、＜分割＞が「与件」とされた空間であると言えるかもしれない。つまり、「社交ダンス界」は、各々に備わった属性（富や社会的地位、学識、名声、能力、功績など）を「隠す」ことが要求された空間であり、踊りの技術の高さ、所作の美しさ、会話の自然さなどの社交ダンスという営みそのものから派生した価値以外のもの、例えば、年収や家族構成やその他「個人情報」などの「生活」に関わる背景への関心を表出させることが制限された空間であるという「建前」を基調としているからである。先に挙げた土屋の言葉を借りれば、日本の「社交ダンス界」とは、参集する人々に「無縁化という要件」を課す空間だと表現することも可能である<sup>6</sup>。そして、「無縁化」されているがゆえに、人々の間には、各人がそれまで持ちえなかった新たな次元での「関係づけ」が生まれ、それが集団の共同性につながっていく、という説明も可能になっていくように見える。

しかし、それでも「社交ダンス界」は「無縁の共同体」という枠組みではとらえきれない。なぜなら、現実に観察できる社交ダンス界とは、完全に無縁化された人々の集まりではないからである。社交ダンス界に参集する人々は、その内部にいる「教師／ダンサー」、外部から参入する「生徒／お客」という立場の違いこそあれ、具体的な顔を持ち、固有の「生活的背景」を持った個人であり、この空間に設置された非日常的な「形式」に沿いながらも、その都度、各々の「生活的背景」を表出させるからである。

そもそも「無縁の共同体」が想定するように、参集する人々の間で「無縁」という状態が維持され、空間に設定された「形式」のみに従い続ける個人という想定には無理があるように思われる。何より、完全に「生活的背景」から分離された個人という想定自体が日本の「社交ダンス界」の現実にそぐわない。なぜなら、いかに「生活的背景」を「隠す」ことが作法として組み込まれた世界であったとしても、そこには「現実の人々の生活共同のリアリティ」（松田 2009: 123）が何らかの形で顔を出すことがあるからである。「無縁の共同体」という枠組みからは、素性を隠し、その空間に設定された「形式」に沿いさえすれば、メンバー間になんらかの共同性が自動的に立ち上がるという前提に立っている印象を受ける。そのため、ある特定の「形式」の支配する空間における共同性の成立にはどのようなプロセスが見られるのかについての考察をこれ以上進めることができないのである<sup>7</sup>。

以上から、本稿では「無縁の共同体」という枠組みを、社交ダンス界を語るうえでのひとつの極に据えつつも、その枠組みによってはとらえきれない現実に注目する。

## 2-2. 人工的な空間における共同性論

近年の人類学においては、これまで研究の対象とされてこなかった分野の小集団における共同性に関する研究が行われるようになってきている（e.g. 市野澤 2003、ラトゥール 1999、田辺 2009）。例えば、田辺（2009）はタイのエイズ患者による自助グループを事例に、各メンバーが自らの置かれた状況をいかにとらえ直しているのかを考察している。ここでは人類学の既

存の共同体概念の固定性を問題視しながら、より開放的、流動的な概念としての「コミュニティ」を採用し、成員が各々の「生活的背景」をその都度参照しながら、ある種の共同性を生み出す様相が描き出されている<sup>8</sup>。

しかし、私見によれば、ここには次のような課題が積み残されている。第1には、これまでの共同性に関わる議論は、人と人とが集まることを暗黙のうちに肯定的にとらえているために、結びつきの側面が主題化されてきた点である。そのため、人々が互いの距離を意識的、無意識的に設定する側面および、その現れ方への視点が後景化していたのである。

第2には、結びつきに対する個人の主体性に焦点が当てられているために、人々の集まりが、結合と分離といった相反するモーメントが調停された現象態であるということ（内堀 2009: 28）をとらえそこなっている点である。つまり、人々が「どのように」結びつくかを説明することを重視するあまり、「距離」への注目が置き去りにされ、「どこまで」結びつくのかに関する説明が手薄であった。共同性を生み、そこになんらかの継続的な秩序を維持する様相を描くためには、結合だけでなく「適度な距離感」についても考察を加える必要がある。

第3に、参加の際にある特定の「形式」（本稿で言う異性との身体接触）に沿うことが求められた空間への関心がほとんど払われて来なかった点である。それまでは、「生活の必要」や、ある特定の政治的、経済的、身体的、精神的な「問題」を抱えた人々による切迫した生存感覚を基礎とした集団が人類学的な集団研究の考察の対象であり、社交ダンスのように日常から離れた領域にある空間は考察の対象とはされてこなかった。

そこで本稿では、異性との身体接触（結びつき）が要件とされた空間において、「カップル」となった一对の男女がいかなる距離をとろうとしているのかに注目する。

では、人工的に創出された空間としての社交ダンス界は日本においていつ、どのように登場したのだろうか。そして、現在どのような状況にあるのだろうか。次節からは、日本における社交ダンス界の来歴を振り返りつつ、現在そこに設定されている「異性との身体接触」という要件が、この空間に参集する人々にとっていかなる意味を持つのかについて、具体的な事例に沿いながら検討していく。

### 3. 人工的な空間としての日本の社交ダンス界

#### 3-1. 「異文化」としての社交ダンス

一般に、社交ダンス<sup>9</sup>とは一对の男女（カップル）が交際のために踊るダンスを指す用語である（永井 1997）。男女が一对になって踊るといふ踊りの形態は、幕末から明治期にかけて西洋から日本に導入されたものであり（富田 1984、Karatsu 2003）、導入当初は西洋式の交際の一環として、政府要人や爵位保持者といったいわゆる上流階級の人々によって営まれていた。それが 1920 年代からは庶民の間にも普及するようになったのだが、男女が対になるという「形式」を持つ社交ダンスは日本に紹介された当初から、「不道徳」という名の下に警察による取締りの対象とされてきた（永井 2002）。社会的な交流のために男女が身体を密着させるという行為は、それまでの日本にはなじみの薄い習慣であり、「不道徳」「売買春の温床」として当初から日本社会の周辺に位置付けられていた<sup>10</sup>。

例えば、大正期に活躍した日本の芸能研究家の一人である小寺融吉は、日本における「社交ダンス」の導入に際して次のように述べ、男女が対になった踊りと日本の文化的土壌との相性の悪さを指摘している。

「外国には社交舞踏といふものがある。…日本の農村の舞踊を見て…常に奇異の感に打たれるのは、日本人が『一対になって舞踊する』観念のない事である。…男と女で舞踊する、といふ観念が、日本と外国と非常にちがふ。元より盆踊の大群衆の圓形舞踊に於て、異性が加はつてゐるといふ事實は、大なる歓喜ではあるものゝ、衆人環視の前で、ジョージとメリイが舞踊する如く、太郎とお花が舞踊しはしない。」  
(小寺 1928: 51-53)

このような社会的認識は戦後にも引き継がれ、社交ダンスに関する営業行為全般（教授所、ダンスホール等）が風俗営業取締法（1948年制定）によって取り締まられることになった。これに対し、1920年代から社交ダンス教師や愛好家による対抗運動が行われるようになる。その戦略として採用されたひとつの理論的根拠が「スポーツ／競技」<sup>11</sup>という自己規定であった（永井 1991）。つまり、社交ダンスとは決して「いかがわしいもの」ではなく健全な「スポーツ／競技」である、ということを主張することで社会的な地位の向上が目指されたのである。

この流れは戦後の風俗営業取締法からの適用除外運動へと継承されていく。そして、1998年に「社交ダンス教授所」は適用除外になり、社交ダンスというサービス商品を提供する場としての社交ダンス教室は、少なくとも法律の上では風俗営業法によって取り締まられるものではなく、健全な「スポーツ／競技」もしくは習い事の場として規定されることとなったのである<sup>12</sup>。

現在の日本の社交ダンス界における代表的な教師団体に「日本ボールルームダンス連盟 *Japan Ballroom Dance Federation*」<sup>13</sup>がある。会費収入に次ぐ基幹事業が「競技会事業」であり、年間収支全体の約3割を占めている<sup>14</sup>。この傾向は北海道においてより顕著に見られる。図に見られるように、北海道では「競技会等」「選手登録料」といった競技会関連の収入が全体の実に75%を占めており、業界全体が競技会開催に依存している状況がうかがえる。

確かに、「スポーツ／競技」として自己規定していくことや、それに伴うメディアでの露出等の影響により<sup>15</sup>、1920年代に比べて社交ダンスの社会的地位は格段に上昇している。もはや「社交ダンス」とは「風営法」で取り締まられる対象でもなければ、公に「不道德」であると指弾されることもほとんどない。しかし、社交ダンスに魅かれて「教室」や「ホール」にやってきた人々の声からは、今も社交ダンスをするうえでの何かしらの「後ろめたさ」のようなものを垣間見ることができる。筆者が行った聞き取りでは、次のような言葉に出会うことができた。

「今月でしばらくお休み（社交ダンスを習いに教室に来ることを）しようと思っています。やっぱり、フラダンスなら良いんだけど、社交ダンスはダメって。家族がね。」  
(50代女性、2010年5月<sup>16</sup>)

「お父さん（夫）には内緒なんです。いつも火曜日のお昼からはお父さん（夫）が出かけているから、その時に合わせて、お掃除とか夜ごはんの支度なんかも全部して、それから教室に来るんです。でも、この前なんて、たまたまお父さん（夫）の用事がなくて家にいて、どこ行くんだ？って。」

(70代女性、2010年5月)

「おばあちゃんからは『男子と腰はつけてはいかん』って言われてきました。そういうのもあって、いつまで経っても慣れないですね。（異性と身体を接触させて踊ることに）」  
(30代女性、2008年6月)

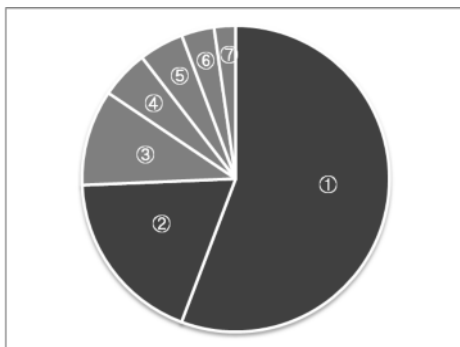


図1 北海道社交ダンス界の収益構造(2010年度)  
『JBDF 北海道総局平成22年度事業報告書』より筆者作成.

当然、社交ダンスに対する3者の態度は、社交ダンスの社会的地位の低さのみに由来するものではないだろう。例えば、社交ダンスを習い続けるうえでの経済的な要因や、外出に関する家族内の慣習のようなものが、これらの声に反映されているかもしれない。しかし、現在の日本人の女性の持つ社交ダンスへの印象の一面を表していることには変わりはないだろう。では、現在の日本で社交ダンスは具体的にどのような場所で踊られているのだろうか。

### 3-2. 社交ダンス教室とダンスホール

現在の日本で社交ダンスが踊られる主な場は、社交ダンス教室やダンスホール、もしくは各種団体の主催するダンスパーティーなどである。その代表例としての「社交ダンス教室」と「ダンスホール」は社交ダンスが踊られる場であるという点では同じであるが、「生徒/お客」の社交ダンスへの取り組み方には違いがある。

「社交ダンス教室」で行われるのは、基本的には顧客への社交ダンス教授であるが、それ以外には各種パーティー等のイベントの開催、若手従業員の競技会への動員、顧客のアマチュア技術検定への動員等がある。営業時間は、12時前後に開店し、21時前後に閉店するというものが一般的である。「生徒」が社交ダンスを教室で教わろうとすると、最初に「入会金」を支払うことが求められる。そして、「レッスンチケット」と呼ばれる回数券に相当する冊子を購入し、レッスンを受ける度にそこから必要分を「教師」に渡すことになる。レッスンは基本的に1対1で行われるが、「サークル」と呼ばれるグループレッスンも並行して行われる。「社交ダンス教室」とは、基本的に「生徒」が「教師」に「教えてもらう」場であり、「生徒」が「教師」の身体を「借りて」踊りを習得していく場である(写真1)。

一方、「ダンスホール」には、「ダンサー」と呼ばれる男性従業員が配置されており、「お客」に対してダンスの「お相手」をすることで対価を得る。現在の日本では、「ダンスホール」に集う人々の大半を中高年の女性が占めているため、男性の「ダンサー」を置くことが必要とされている<sup>17</sup>。

営業時間は、一般的に午後1時頃から4時頃まで(昼の部)と午後6時頃から9時頃まで(夜の部)という2部制の場合が多い。オーナーは、営業時間中、フロアに曲を流し、簡単なドリンクを用意してセルフサービスで提供する。例えば札幌市のダンスホールSでは、「お客」は入場料として女性は2,000円、男性は1,000円支払う(女性はダンサーが踊りの相手をしてくれるため男性より高額)。「ダンスホール」とは、基本的に「お客」が「ダンサー」の身



写真1. 社交ダンス教室でのレッスン（札幌）  
「教師」は筆者。2010. 7. 1 撮影



写真2. ダンスホールの営業風景（札幌）  
男性は「ダンサー」、女性は全員「お客」。  
この日の「お客」は15人。2010. 9. 27 筆者撮影

体を「借りて」相手をしてもらう場所である（写真2）。

以上のように、「教室」と「ホール」ではその営業形態に違いが見られるが、そこに集う人々にはある重要な共通点がある。それが「形式」への依拠である。

社交ダンス界（教室、ホール）に集う人々は、みな一様に「社交ダンス用の」衣装に身を包み、「社交ダンス用の」ふるまいで他者に接する。そして、カップルになった相手と身体を接触させる。つまり、社交ダンスの世界とは、その場にふさわしい服装をし、その場にふさわしい会話の内容を選び、状況にふさわしいステップを仕掛け、対応する、といった、ある特定の「形式」に沿いながら、その場の状況に自身を適合させることが美德とされた世界である。その「形式」の中には「外部の社会関係を持ち込まない」という基準も含まれている。ここで言う「外部の社会関係」とは、職業や収入、家族構成や出自などといった各人の「生活的背景」のことであり、この「生活的背景」を不問にすることが社交ダンスの世界では求められる。ここに参集する人々は他者の「生活的背景」を詮索することを厳に慎むことが求められ、逆に自らの「生活的背景」を過度に公にすることも自制することが求められる。ゆえに、話題に選ばれやすいのは、踊りの技術や所作に対する称賛であり、取り組む姿勢の熱心さや髪型や衣装などの外見に対する賛美といった、社交ダンスという営みそのものに由来する話題である。

前掲の土屋は、中世日本の連歌に同様の要素を見出している。土屋は、連歌とは「念仏聖も上皇も、同じ無縁平等の人として」参加する場であり、「当然に無礼講」なものであったと規定し、「身分」といった「外部の社会関係」の持ち込みが強く制限された場であったことを指摘している（土屋 2002: 14）。これにならうと、日本の社交ダンス界とは、参集する人々に「無縁化という要件」を課す空間であり、社交ダンス界とは「生活的背景」から分断されること（無縁化）が参加の要件とされた空間であると言える。筆者が行った聞き取りからは「教師」が「生徒」に対して次のような姿勢で臨んでいることが指摘できる。

「ホストに似ているところがある。宗教みたいとも言える。自分のファンを増やして、自分を好きになってもらって。自分という人間が好きで習いに来てくれる人を増やすことがおれ達の仕事みたいなもの。そのためにも夢を見せてあげないと。」  
（40代教師、男性、2010年7月）

「僕はお客さん（生徒）によく言うんですけど、『教室のドアを開けた瞬間に、いつもの自分じゃなくて別人になったつもりで』って。」  
（30代教師、男性、2010年7月）

「夢を見せる」「別人になったつもりで」といった言葉に表れているように、ここから見出せるのは、非日常を演出することが「教師」としての職務であるという自覚である。このようにして、「教師」は、自らの提供できるサービスが非日常的なものであるということを「売り」にして、様々な側面に非日常の薫りを演出しようとする。つまり、「生徒／お客」を日常の社会的関係から分離させることを「教師」が積極的に促進しているのである。この点に注目すると、社交ダンス界とは「無縁の共同体」の枠組みに沿った忠実な事例であるように見える。しかし、確かに「無縁」の枠組みで説明できる部分もあるが、次節で見るように「異性との身体接触」という「形式」に沿うがゆえに「生活的背景」を表出させてしまうことも生じ、「無縁」の者同士の集団という規定は社交ダンス界には完全に適用することができないのである。

#### 4. カップル空間における共同性

##### 4-1. 与件としての「異性との身体接触」

（事例1）「異性との身体接触」という非日常（2009年8月）

Aさんは札幌市内で看護師の仕事をする35歳の女性（独身）である。最近、職場が変わったため、気持ちを新たに何かを始めたいと思い、また、母親が昔から社交ダンスを習っており、以前から勧められていたということもあって、この4月に教室に通い始めたばかりである。市内の社交ダンス教室には週に1回通い、毎回、特定の「教師」（20代後半、男性）からレッスンを受け、レッスン後は他の生徒の邪魔にならない範囲で自主練習をしている。Aさんはこれまで格闘技（合気道、空手）を習ってきたという経験を持ち、異性との身体接触を伴う活動はこれが初めてではない（Aさんが通っていた空手道場の門下生の大半は男性）。また、看護師という職業柄、日頃から患者の身体に触れるため、Aさんにとって他人（特に異性）の身体への接触は取り立てて特別なことではない。しかし、社交ダンスをするうえで求められる身体の接触とは、「常に」身体の一部（もしくは大部分）を他人と接している状態であり、しかもその相手が異性であり、格闘技や看護師の業務における身体の接触とは次元の異なるものである。自分では身体を密着させているつもりなのに「教師」からは常に、「腰が引けている。もっとくっつくように」という指摘を受ける。Aさんにとっての社交ダンスにおける異性との身体の接触とは、「おっかない」ものであると同時に「新鮮」なものである。

社交ダンスの世界には、一对の男女の組のことを「カップル」と呼ぶ習慣がある。この「カップル」になること、そして身体を接触させることが、社交ダンスを始めるにあたっての出発点になる。社交ダンス教室にやってきた「初心者」が社交ダンスを教わる場合、最初は互いに離れた簡単なステップを踏むことから始められることが多いが、すぐに密着度を増した種目へと移ることが一般的である。社交ダンスを他のダンスに比して特別にしている点は、この一对の男女（カップル）によって行われるという点にあると言えるだろう。つまり、男女2人1組であるという点、そして、異性との身体の接触が伴うという点が前提とされているダンスが社交ダンスなのである。

社交ダンスに取り組み始めた「初心者」は「教師」からの「もっとくっつくように」という要求に往々にして戸惑うことが多い。自身の日常に、個人的関係のない異性とこれほど身体を接触させる機会はなく、ましてその状態が踊る間中ずっと維持されるからである。

Aさんがこの時に取り組んでいた踊りは、半身を相手と常時合わせて踊る「ワルツ」（写真1参照）と、身体の一部（特に手）を形態を変えつつも常時接触させた状態で踊る「ルンバ」



であった。Aさんにとって、格闘技と看護師の業務、すなわち「生活的背景」における「異性との身体接触」と、社交ダンスにおけるそれとは同じものではない。つまり、格闘技などでは「一時的に」身体が異性と接触することはあるが、社交ダンスでは身体が異性と「常に」接触しているのである。身体が異性と常に接している状態になじみの薄い人にとって、社交ダンスをするために要求される根本的な作業（異性と身体を常に接触させること）は、文字通り「腰が引ける」行為である。むしろ、「2人の男女」が「身体を接触する」ということは、写真1に見られたように、互いの半身を接触させている状態が常であり、この意味では、「接触」というよりも「密着」と表現する方が適当であるかもしれない。社交ダンスには、大きく分けて「スタンダード」「ラテンアメリカン」の部門があり、各々で男女の接触度に違いはあるものの、両部門とも基本的には「接触／密着」を常態としているのである。

「空手だったら、向かい合って目なんかで見て相手の気を読むことに神経を使うんですけど、社交ダンスの場合は、常にくっついていないといけなから、どうやって相手の動きに反応して良いのが難しいですね。でも、同じスポーツなんで、共通しているところはあるし、勉強になると思います。」

(Aさん、2009年9月)

Aさんは格闘技や看護師といった、この空間の「外」にある「生活的背景」を参照項にして、社交ダンス界における「異性との身体接触」という新しい経験を、なんとか自身の感覚に近いところにたぐり寄せようとしている。彼女にとって社交ダンスにおける異性との身体の接触は、「おっかない」ものであると同時に、格闘技と同じ「スポーツ」の一環である。社交ダンスを「スポーツ」と見なすことによって、「異性との身体接触」という行為が持つある種の「不道德感」を希釈することができるのであろう。換言すると、異性と身体を接触することに対する逡巡を緩和し、自身の身体を相手の身体に接触させる方向に向かわしめるモーメントが「競技」という論理なのである。

一方、「教師」にとって「非日常」を演出することには限界がある。例え、清潔な印象を与えるように髭を剃って髪をセットし、歯を磨き、しわのないシャツとスラックスに身を包み、ネクタイを締めて姿勢を起こすといった、考える全ての外見的要素を「非日常」向けに整えたとしても、演出しきれない部分が出てきてしまうのである。なぜなら、身体を接触させることにより、筋肉の付き具合や体温、息づかいやにおいなど、演出では隠しきれない情報を交換し合う関係に置かれるからである。つまり、異性と身体を接触させるという「非日常」を提供しようとしても、まさに互いに近付くがゆえに、互いの「日常」（身体）に関する情報を交換し合ってしまうということが起こるのである。

#### 4-2. 「競技」という後押しと2つの要求

##### （事例2）「競技」による「異性との身体接触」の許容（2011年6月）

Bさんは小樽市内で管理職に就く60歳の男性である。5年前にCさん（小樽市内勤務、56歳女性、数年前に離婚し現在は独身）と競技会への出場（アマチュアシニア部門）に向けてカップルを組み、練習と競技会出場を経験した。しかし、相互の意見の食い違いなどから1年間の競技会出場の後にカップルを解消した。その後、互いに話し合いの場を持ち、昨年再びカップルを結成することになり、現在は週に3回ほど互いの仕事の後、20時頃から22時頃まで練習している。BさんとCさんは、各々が1万円の月謝を教室に支払い、週に3回まで練習に

来て良いという教室との取り決めのもと練習に通っている。基本的には教室での待ち合わせ時間を決め、2人がそろった時に練習を開始することにしており、毎回、所属教師のうち誰かに教えてもらうことになっている。競技会が近い時には、本番を想定した「踊り込み」練習を行うことが多い。Bさんの妻（60歳）も同じ教室でダンスを習っているのだが競技会出場への意思はなく、したがって夫との競技会出場も考えていないと言う。BさんとCさんのカップル再結成についてBさんの妻は、2人が練習する様子を見ながら「4年か5年前に（BさんとCさんは）競技に出てたんだよね。本人（夫）はすごく好きみたいだからね（競技会に出ることが）。まあ、いいんじゃないの。焼けぼっくいに火がついたんだね。」と笑う。

たとえ、社交ダンスという非日常の営みであるとは言え、互いに夫婦ではない中高年の男女が身体を接触させるという行為は、現代日本の社会通念では決して「良い」ものとはされていない。しかし、そこに「競技会」に出場するため、という条件が追加された場合、事情が違って来る。確かに、「競技」目的さえあれば、夫が自分以外の別の女性と身体を接触することに諸手を挙げて賛成するというわけでは、おそらくないだろう。しかし、内心については推量するしかないが、結果的には「まあ、いいんじゃないの。」と言って、夫の「カップル化」を承認しているという点は明らかである。この「承認」を「競技」という要素が後押ししたことは十分考えられる。

競技会に出て好成績を収めるために求められる要素は、大きく分けて、スピード、シルエット、音楽性である。特に美しいシルエットを維持しつつ、見る者にスピード感をアピールするためには、互いの「ボディ」を密着させる必要がある。互いの身体の中の噛み合わせが緩いと、ターンや回転をする時に2人が「分解」してしまうからである。競技会に出場する選手に対するレッスンの焦点もここにある。つまり、動く中で「ボディ」が離れないように指導することが、レッスン内容の中心を占めるのである。そのため、「カップル」になった2人には、「教師」から「もっとくっつくように」と要求され、その要求を内面化した2人も互いに「もっとくっつくように」しようとするのである。

一方で、練習時間以外、2人（BさんとCさん）はほとんど会話をしないし、あまり近付きもしない。おそらく2人の間で暗黙のうちに、互いを単なる「競技会に向けたパートナー」という関係に積極的に位置付けようとしているのかもしれない。だとすると、2人には次のような、相反する2方向の要求が向けられていることになる。一方は社交ダンス界という空間から発せられる結合の要求であり、もう一方は社交ダンス界の「外」（生活的背景／日常）から発せられる分離の要求である。

現在の日本で一般的に「社交ダンス」と呼ばれているものの中身は、大きく次の2つに区分されている。それは「競技」と「社交」である。この区分は日本に限らず世界的に見られる傾向である（McMains 2006、Myers 1984）。例えば Myers（1984）によると、アメリカでは「社交のための踊り」は「競技のための踊り」の劣化版であるという社会的認識が存在すると指摘されている。また、英語圏では「社交のための踊り」は *social ballroom dancing*、「競技のための踊り」は *competitive ballroom dancing* と区別して呼ばれる傾向にある（McMains 2006）。現在では、「競技のための踊り」は「ダンススポーツ *Dance Sport*」という呼称で統一される傾向にある<sup>18</sup>。

少なくとも日本において社交ダンスを「競技」の文脈で語る時、男女の身体接触に伴う「不道德」感は薄められ、密着した2人の男女は「〇〇（男性の姓が入る場合が多い）カップル」

という名の下に競技会に挑む「戦友」という関係に置き換えられる<sup>19</sup>。

一方で、「社交」の文脈で社交ダンスが語られる時、そこには互いの関係をどのように形容して良いのかが分からない「収まりの悪さ」がつきまとう。なぜなら、「競技」という目的意識に比べ、「社交」という目的はいかにも曖昧であり、「社交」という言葉の広範囲にわたる意味の中に、「競技」では一掃されていた「不道德」の要素が息づいているからである。

日本において、社交ダンスを「競技」として規定することを目指す団体に「日本ダンススポーツ連盟 *Japan Dance Sport Federation*」<sup>20</sup>がある。この組織の北海道支局で理事を務める女性は「(私達のやっていることを) 社交ダンスって呼ばないで下さい。ダンススポーツって呼んで下さい。」(80代女性、2010年10月)と、「社交ダンス」という言葉の持つ歴史的な「不道德」感からの決別を筆者に対して明確に表明していた。「社交ダンス」も「ダンススポーツ」も形態のうえでは、一対の男女(カップル)で構成されるという点で同じである。しかし、そこに「競技」の要素を持ち込み、名称まで変更することで「社交ダンス」が歴史的に負わされてきた周辺性を払拭し、社会における積極的な地位を獲得しようという意図がここには読み取ることができる。

#### 4-3. 互いに結びつき過ぎることを抑制する工夫

社交ダンス界では、「異性との身体接触」という非日常的な「形式」に沿うことが要件とされている点で、カップルになった男女が互いに「結びつく」ことが自動的に確保されているようにも見える。しかし、人々の集まりが結合と分離といった相反するモーメントが調停された現象態であるということとを考慮すると(内堀 2009: 28)、結びつくための「形式」が用意されているというだけで、非日常的な男女間関係への戸惑いを乗り越えて互いに結びつく、と結論付けるには不十分である。以下に示す事例は、「教師と教師」の間において「異性との身体接触」がどのようにとらえられているのかを考えるうえで示唆に富むものである。

##### (事例3) カップル間の距離の調節 (2011年4月)

Dさんは札幌市内で事務職に就く27歳の女性である。社交ダンスは両親の勧めから中学生の頃に始めたことと記憶している。25歳の時に3歳年上の男性(社交ダンス教室に常勤で勤める教師)と競技会出場(プロ部門)に向けたパートナーシップを組み、カップルとして練習してきた。Dさんは「教師」の資格も持っている。そのため、相手の男性との練習が始まる前の数時間に、「生徒」に教えることも行っている。練習は平均して週に5回であり、毎回お互いの仕事が終わった後の21時頃から24時頃まで行っていた。練習はDさんが以前から通っていた教室であると同時に相手の男性教師の所属先の教室を会場にして行われ、ほぼ毎回、教室のオーナー夫婦からレッスンを受けていた。オーナー夫婦からは「けんかするんじゃないぞ。」と冗談まじりに言われたり、「相手とは絶対に恋人にはなってはいけない。(恋人に) となると必ず言わなくても良いことまで言うてしまうから。」などと言われてきた。Dさんも、自分の周りにいるプロ競技選手の多くが恋人同士もしくは夫婦のカップルであるにもかかわらず、オーナー夫婦からそのような言われてきたことで、自分自身もダンスの相手とは距離を置くことが大切だと考えるようになっていく。現在独身であり、恋人もいないが、ほぼ毎日顔を合わせるダンスのパートナーのことを恋人の候補者としては見ていない。オーナー夫婦自体は、プロ部門での現役時代(互いに競技会に出ていた期間)からの恋仲でそのまま結婚に至ったので、Dさんへの助言は自分達の経験を踏まえてのことであるとDさんは認識している。

プロ部門に出場する選手では恋人同士および夫婦のカップルが圧倒的に多い。その理由として考えられるのが、経済的理由、練習効率の良さ、相手への思慕などであろう<sup>21</sup>。例えば、プロ部門におけるカップル間の距離の近さを公私両面で肯定的にとらえている例が以下である。

「うまくなりたいと思ってますよ。もちろんトップに立ちたいし。今のパートナーと。上目指すなら今の相手じゃダメだって言う人もいますけどね。他の先生にもお客さんにも（言われる）。でも僕は今のパートナーとずっとやっていきたいと思ってます。うちの先生（オーナー夫婦）がそうなんで、僕もそうなりたいたいと思ってますよ。好きな相手とトップまで昇っていったお客さんがついて独立して自分のスタジオを持って。」  
(Eさん、25歳男性 札幌の社交ダンス教室の従業員、2011年1月22日)

このような考え方は社交ダンス界の「教師」の間で広く共有された考え方である。つまり、競技会に向けて継続的にパートナーシップを組んだカップルが長く続けていくうちに夫婦になるという場合である。この考え方に対してDさんは自身に置き換えて次のように言う。

「どうなんでしょうね。ほぼ毎日夜遅くまで練習してるわけでしょ。カラダをくつつけるし、汗だっかくし。長くやったら情が移ってなんてこともあるかもしれないですけど…」

(Dさん、2011年1月)

競技会に向けて継続的にパートナーシップを組む間柄において、「情が移って」恋仲になることはさして珍しいことではない。特にプロ部門に出場する「教師」の間では極めて「普通」のことである。むしろ、そのようにして業界の担い手が「再生産」されてきた傾向がある。しかし、「恋人になってはいけない。」という言葉に表れているように、そのことを否定する方向、つまり、「教師」同士のカップルが結びつき過ぎないように工夫が施されているのである。

## 5. おわりに

以上、本稿では北海道の社交ダンス界におけるカップルの相互関係のあり方を事例として、カップル空間において各々の身体接触を通して紡ぎ出される共同性の様相を描いてきた。

具体的には、この空間に参集する人々に対して、建前としては「無縁化」することが要求されてはいても、競技化を背景とした「身体接触を伴うカップル」という「形式」の存在ゆえに互いの「日常」に関する情報を交換し合ってしまう関係や、夫婦関係といった社交ダンス界という非日常の世界の外からの要求によって、カップル間に「分離」を促す傾向が存在することを本稿では確認してきた。

一方で、本稿で参照してきた「無縁の共同体」という枠組みは「無縁化」された人々の集まりによって成立する共同体のことであった。しかし、事例に見られたように、社交ダンスという空間に参集する人々に対して、いかに「無縁化」が要件付けられたとしても、「現実の生活共同のリアリティ」（松田 2009: 123）から完全に遊離した関係は成立しえないのである。

また、仮に参集者の「無縁化」が成立したとしても、「無縁化」によってバラバラになった各個人が再びつながるためにはいかなる仕掛けが必要なのか、という点についても、「無縁の共同体」論には有効な説明が用意されているとは言い難い。なぜなら、2節でも述べたように「形式」（例えば「カップル化」などの空間内に設定されたルール）にさえ従えば、参集者の間に何らかの共同性が自動的に立ち上がる、という説明から、「無縁の共同体」論は脱するこ

とができていないからである。

「無縁化」という要件、および共同性を成立させるとされる「形式」が、その空間に参集する人々に対してどのように作用し、それらの要件自体がいかなる変容を遂げているのかという問いは、今後の人類学的な共同性の議論に新たな地平を拓くものと期待される。本稿で試みたことは、この問いに迫るための出発点である。

### 【謝辞】

本稿は、北海道民族学会 2011 年度第 1 回研究会（7 月 10 日）において行った報告「日本社交ダンス界における『競技化』の進展と商慣行—北海道札幌市の社交ダンス教室を事例に—」の内容の一部を基にしている。報告当日には各方面の諸先生方から数多くの貴重なご意見を頂き、中でも甲地利恵氏には後日、本研究を後押しするような貴重な資料を紹介して頂きました。記して謝意を表します。

### 【注】

- <sup>1</sup> 財団法人日本ボールルームダンス連盟 (*Japan Ballroom Dance Federation*) の発行する教師資格 (商業スポーツ施設インストラクター) のもと。
- <sup>2</sup> 一般に「社交ダンス教室」では「教師/生徒」、「ダンスホール」では「ダンサー/お客 (さん)」という呼称が使用されている。
- <sup>3</sup> 今福龍太 (1993) で指摘されている「トランジット・ラウンジの共同性」と重なるものである。
- <sup>4</sup> 土屋に対する人類学者からの他の批判は、「生活論的視座の欠如」というものである。つまり、外部にある社会関係から完全に自由な空間などあり得ず、土屋は無縁、平等、無礼講を強調し過ぎるあまり、人工的な場と生活の場の間との断絶を前提にしてしまっている、という批判である (松田 2009)。
- <sup>5</sup> 大杉高司はインドの人類学者チャクラバルティの逸話を例に挙げ、両者が物理的、社会的距離により「根源的に<分割>」されているにも関わらず、そこには何らかの「関係づけ」を行うことが可能であるということを指摘している (大杉 2001: 290-291)。
- <sup>6</sup> この与件は社会学者ジンメルと言う「形式」に相当し、その具体的現象形態は「社交」に対応するものと考えられる (cf. ジンメル 1979)。
- <sup>7</sup> 例として松田 (2009: 121-122)。土屋は複数化を礼賛する立場として、次のように述べている。「人間は、おそらく、この離脱の力によって、多数の文化にかかわり、多数の宗教ともかかわり、多数の生命とかかわる。…あらゆる離脱への寛容があつてこそ、この世界は多様性が生み出す、生命の共同体となるはずである。同一性に安住せず、複数の故郷と相違性のうちに生きよ、という声にこそいつも耳をかたむけていたい。」 (土屋 2002: 285-286)。確かにこの指摘は理念的であり、「差異」を強調することに対する過度の期待が込められているようにも映る。また、人類学者が価値を置くような「具体的な」生の有り様 (互いが結びつく様相) について示唆に富むものではないようにも見える。しかし、この指摘は大杉高司による「非同一性による共同性」 (大杉 2001: 292) に対応するものであり、社会的空間を分析するうえでの「無縁の共同体」という枠組みの効力は今後も必要とされていくだろう。
- <sup>8</sup> 田辺 (2010) では事例に見られる共同性が展開される場を「親密圏」に重ね合わせている。「親密圏」とは、人類学が考察の対象にしてきた人々の集合を表すものとしての「民族」「親族」といった概念では代替不可能な用語とされる。
- <sup>9</sup> 日本語で言うところの「社交ダンス」とは、正式には *social dance* の一部である *ballroom dance* をその内容としている (cf. ジョナス 2000)。
- <sup>10</sup> 身体接触を伴うダンスが性的な要素を想起させることは、これまでの人類学においても指摘されてきた点である。例えばクラックホーン (1971: 37-38) では、アメリカインディアンにおける男女の身体接触の禁忌が指摘されている。
- <sup>11</sup> 本稿では「スポーツ」と「競技」をほぼ同義に用いている。ただ、現場の人々の間では、「スポーツ」よりも「競技」という語が用いられる場合が多い。そのため、文意が不自然にならない範囲で、可能な限り「競技」という語を使用することにする。
- <sup>12</sup> 筆者は学部生時代に北海道大学競技舞踏部に在籍し、最初の頃、男女間の身体接触到戸惑った経験を持つ。しかし、先輩から「これはスポーツだ」ということを何度も言われ、そのうち「恥ずかしい」

という気持ちが薄れ、だんだんと気にしなくなったという経験がある。

- <sup>13</sup> 1992年設立の教師団体。前身は「日本競技ダンス連盟」（1951年設立）。会員数は約13,000人（2011年12月1日現在）であり、会員数のうえで社交ダンス教師団体として日本で最大の規模を誇る。
- <sup>14</sup> 『財団法人日本ボールルームダンス連盟（JBDF）平成21年度事業報告書』より。
- <sup>15</sup> 例えば、1996年に放送が開始された日本テレビ「ウリナリ芸能人社交ダンス部」や、同年公開された「Shall we ダンス？」（周防正行監督、大映：当時）など。
- <sup>16</sup> （2010年5月）とは、民族誌的現在が2010年5月であることを示す。調査期間が長期にわたるため、民族誌的現在は以下この様式で事例ごとに記載する。
- <sup>17</sup> ダンサーを置かず、場所を開放しているだけのダンスホールも存在する。そこではカップルとして来店した2人が練習に使用したり、オーナーの司会によって来店者同士が踊るように工夫される場合もある。
- <sup>18</sup> 1980年代頃からの呼称。背景にはオリンピックの正式種目化への志向がある。そのため母体は「アマチュア団体」であり、プロ組織（教師団体）とは必ずしも足並みを揃えているわけではない。
- <sup>19</sup> ある「教師」は、競技会に出場するカップルの関係を「戦友」という比喻で表現していた。
- <sup>20</sup> 全日本学生舞踏競技連盟（1949年）、アマチュア選手会（1972年）、日本社会人ダンス連盟を母体とする日本アマチュアダンス協会（1977年）が前身。1999年設立。
- <sup>21</sup> 井上（2011）では、日本社交ダンス界の内部に生きる人々（教師）の男女交際や結婚といった、「競技化」を背景としたカップル間の社会的結合の側面が描かれている。

#### [参考文献]

市野澤潤平

2003『ゴーゴーバーの経営人類学』めこん。

今福龍太

1993「混合主体のエチカ」『別冊 談 夏号』第48号 たばこ総合研究センター:4-13.

井上淳生

2011「フロアの中の人生—ある社交ダンス教師の肖像—」『留萌文学』第96号:108-113.

ジョナス, ジェラルド

2000「社交の踊り」『世界のダンス』第4章 田中祥子/山口順子訳 大修館書店.

Karatsu, Rie

2003 Cultural Absorption of Ballroom Dancing in Japan. *Journal of Popular Culture (The Popular Culture Association, USA)*, vol. 36, no.3: 416-440.

クラックホーン, クライド

1971『文化人類学の世界：人間の鏡』外山滋比古・金丸由雄訳 講談社現代新書.

小寺融吉

1928「日本と欧州の娯楽的舞踊の比較」『民俗芸術』第3巻第8号:51-57.

ラトゥール, ブルーノ

1999『科学が作られているとき：人類学的考察』川崎勝, 高田紀代志訳 産業図書.

松田素二

2004「変異する共同体—創発的連帯論を超えて—」『文化人類学』69 (2):247-270.

2009「グローバル化時代における共同体の再想像に向けて」『日常人類学宣言！：生活世界の深層へ／から』第4章 世界思想社:115-143.

松岡心平

1991『宴の身体—バサラから世阿弥へ』岩波書店.

McMains, J.

2006 Representation of Social Dance : A Genealogy of Improvisation. *Glamour Addiction: Inside the American Ballroom Dance Industry*: Wesleyan University Press, chapter 2: 63-107.

Myers, E. A.

1984 Ballroom Dance as a Commodity : An Anthropological Viewpoint. *Journal for the Anthropological Study of Human Movement* 3.2: 74-83.

永井良和

1991 『社交ダンスと日本人』 晶文社.

1997 「社交ダンス」『民間学事典 事項編』 鹿野政直ほか編 三省堂.

2002 『風俗営業取締り』 講談社選書メチエ.

小田 亮

2004 「共同体という概念の脱／再構築—序にかえて—」『文化人類学』 69 (2): 236-246.

大杉高司

2001 「非同一性による共同性へ／において」『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』  
杉島敬志編 世界思想社: 271-296.

ジンメル, ゲオルグ

1979 『社会学の根本問題』 清水幾太郎訳 岩波文庫 原版 1917 年.

田辺繁治

2008 『ケアのコミュニティ』 岩波書店.

2010 『「生」の人類学』 岩波書店.

富田 仁

1984 『鹿鳴館：擬西洋化の世界』 白水社.

土屋恵一郎

2002 『正義論／自由論—寛容の時代へ』 岩波書店.

内堀基光

2009 「単独者の集まり：孤独と『見えない』集団の間で」『集団—人類社会の進化』 京都大学学術出版会: 23-38.

(いのうえ・あつき／北海道大学大学院)